

●学習題名

—米国における鑑賞教育の在り方と実践事例—

●執筆者名

徳 雅美

カリフォルニア州立大学チコ校

●学年、活動内容区分

中学1～3年(7th～9th grade)／鑑賞活動

●事例概略

米国の学校教育における鑑賞教育の在り方を日本の鑑賞教育と比較し、また具体的にどのように鑑賞教育が行われているのかをDBAEとVTS理論の比較を通して検討していきたい。文化的背景の異なる米国における鑑賞教育ではあるが、その現状を検証することは、今後の日本における鑑賞教育の意義を再認識することにもなると信じている。

1 はじめに(米国における鑑賞教育の在り方)

昨今、美術教育における鑑賞教育の重要性がさかんに語られ、また方法論においてもその可能性が言及されている。しかし、「鑑賞」という言葉のもつ多義性から鑑賞教育の定義が決定されていないのもまた事実である。美術教育における鑑賞教育とはいったいどういう教育なのであろうか。芸術を鑑賞する際に起きるであろう美的感性を高めるための教育なのか、芸術を理解するための知的能力を高めるための教育なのであろうか。またこの両義を含んでいるのか。

「鑑賞」という言葉を英語に訳すと「アプリシエーション(Appreciation)」^{註1}となるようだが、その言葉の中には「鑑賞する(見て楽しむ)」という意味と同時に「考える」という意が含まれている。米国でいうところの鑑賞教育は「感じさせる」のではなく「考えさせる」教育ということが出来る。その語意を反映するかのよう、現在米国において一般的に行われている鑑賞教育は、一言でいうとヴィジュアルリテラシー(Visual Literacy)を高めるための教育であると言及できる。直訳すると「視覚読み書き能力」となるが、これには二つの定義がある。一つは芸術に接した時、その芸術作品を批評理解する能力^{註2}であり、視覚思考能力(Visual Thinking Ability)とも言い替えることができる。一つは芸術を鑑賞した時の嗜好の要因を自分の言葉で表わすことができる能力^{註3}である。第二の定義については「なぜ私はこの作品が好きでこの作品は好きでないのか」を思考し、さらに自分の言葉で表現できる能力といえる。

2 米国の学校教育における鑑賞教育の事例

具体的にどのような「鑑賞教育」が米国において、一般的に実施されているのだろうか。日本と異なり、国定の「学習指導要領」を元にしたカリキュラムなど存在しない米国において、一般的な「鑑賞教育」方法を指摘するのは至難といわざるをえない。が、米国において最も広く浸透している美術教育理論であるDBAE(ディーヴィーエーイーと発

音)における鑑賞教育の捉え方と、実践において最近富に評価されているVTS(ヴィティイーエスと発音)を比較することによって、米国における鑑賞教育の実態を紹介してみたい。

(1)DBAE (Dicipline-based Art Education)^{註4)}における鑑賞教育

DBAEは「ディシプリン(学問性)に基づく美術教育」の頭文字からなる略語であり、美術作品制作に重きを置いた美術教育に対する反動から生まれた、学習指向の美術教育理論である。1960年代に基本理念が生まれ、1980年代に広く普及したDBAEの特徴は、美学、美術制作(造形)、美術史、批評の四つの理念を含んだ形での美術教育カリキュラムの作成実施を推奨している点である。「物を作る」から「物を考える」美術教育への大いなる変換を促しているともいえる。こういった特徴上、むしろDBAEそのものが広義の「鑑賞教育」とも言え、「鑑賞」という行為を切り離しておらず、単独のカリキュラムは唱っていないのが特徴でもある。

下記に中学高校美術教育{Secondary Art Education)におけるDBAE理論に基づいた鑑賞教育の事例として三点程上げておきたい。

①ウエストリッジ中学校(グランドアイランド市、ネブラスカ州、Westridge Middle High School, Grand Island, Nebraska)における鑑賞教育—社会学との連携—

鑑賞題材「メキシコ壁画」

鑑賞目的:現代メキシコ壁画アートと他の美術材料とを比較考察、さらにメキシコ壁画の歴史的背景を通して美術の価値を考える。

鑑賞活動:

- 壁画と他の美術素材との比較することによって各々の特徴を考える(美術史、批評、美学)。
- 美術における政治的テーマを考える(美術史、批評、美学)。
- 壁画の中に描かれている政治的、社会的、経済的内容を考える(美術史)。
- メキシコ人壁画家、リベラ(Diego Rivera)、オロスコ(Jose Clemente Orozco)、シンキエロ(David Alfaro Siqueiros)らの伝記を通して、各々の作品の特徴を知る(美術史)。
- リベラの作品である「花の日(Flower Day)」の批評分析をする(批評)。
- メキシコの歴史と文化を内在させた壁画作品を皆で作成する(制作)。

②オーディアン中学校(デュルス市、ミネソタ州:Ordean Junior/Middle School, Duluth, Minnesota)における鑑賞教育—歴史、社会学、科学との連携—

(学年を通しての)鑑賞題材「各々の時代のアートと社会」

鑑賞目的:時代を反映するアートの特徴を通して社会的文化的背景を学ぶ

鑑賞活動:

- イ)活動1「超現実主義アートとバーチャル世界」
 - 超現実主義者ら(ダリ等)が創造した夢想的、近未来的風景の表現方法を学習(美学、美術史)。
 - 遠近法を使って超現実世界を表現してみる(制作、批評)。
- ロ)活動2「ヨーロッパ中世アートとシンボリズム(象徴性)」
 - ヨーロッパ中世アートの中に現われるイメージ(土牢、竜、大聖堂、衣装、スタンドグラス等)からその装飾的、機能的デザインの意義を学ぶ(美学、美術史)。
 - ゴシック時代アートの特徴(飛梁=フライングバットレス、グロテスク、尖頭アーチ等)を学ぶ(美術史)。
 - 学習を元にゴシック大聖堂をデザインして見る(制作、批評)。
- ハ)活動3「芸術と世界の出来事」
 - 世界の出来事(ベルリンの壁の崩壊、ペルシャ湾岸戦争等)を通して芸術と政治のかかわりあいを考える(美術史、歴史、批評)。
 - 世界の通貨をデザインしてみる(制作)。
- ニ)活動4「科学と芸術」
 - レオナルドダヴィンチのスケッチブックを元に芸術と科学の関連性を学ぶ(美術史、科学、批評)。
 - ルネッサンス時代のテクノロジーを可能な限り駆使して、娯楽施設をデザイン制作して見る(批評、制作)。
- ホ)活動5「近代アートの特徴」
 - 近代アートの特徴を学習(美術史、美学、批評)。
 - 近代アートの中から三つのムーブメント(近代抽象主義、キュービズム、点描画等)を選び、それらの特徴を混在した形で絵画、コラージュ、彫刻等を制作して見る(制作)。

③マンズフィールド アート センター(ビュキー郡、オハイオ州:Mansfield Art Center, Buckeye Country, Ohio)における鑑賞教育—美術館との連携—

鑑賞題材「東と西」

鑑賞目的:古典を通して現代芸術を学ぶ

鑑賞活動1

- 質問アンケート用紙を通して生徒の「日本」に対する(文化、価値観、歴史、美術等)知識の度合を計る。同様の確認を「アメリカ」に対しても行う。
- 日本美術展「Sakura」を訪問。日本映画鑑賞、ゲストスピーカー(日本人交換留学生、日系人、日本人作家等)と対話の後、展示作品を分析批評してみる。
- 日本社会と歴史の調査研究開始(日本について討論会、日本食の実演会を開催)
- グループに分かれ、各グループで日本美術のついて各々のテーマ(陶芸、版

画、絵画、書道、彫刻、建築等)にそって調査研究を行う。

-各グループで配布資料を作成し、テーマにそって発表を行う。

-各人は自分の研究グループのテーマに沿って作品を作成する。

鑑賞活動2:

-各人アメリカ芸術について調査研究を行う(各一人のアメリカ人作家を選択)。

-各人調査研究した内容について配布資料を作成し、クラスで発表を行う。

-各人選択した作家の特徴を紹介するような作品を作成し、クラスで紹介する。

鑑賞活動3(比較レッスン I と II):

-比較レッスン I (テーマ「windows of Nature」)において、日本風景画と19世紀アメリカ風景画(ハドソン川スクール派)を比較することによって、二国間の相違を探る。

-日本人とアメリカ人の自然に対する態度の相違を発見し、どうシンボル化しとして表現しているかを調べる。

-比較レッスン II (テーマ「High Drama at Sea」)において、アメリカ人画家であるホーマー(Winslow Homer)と北斎の絵画に描かれた「海」の違いをさぐる。

以上三つの事例を上げたがこの他にもフロリダ州、サラサト市にあるリングリング美術館(Ringling Museum of Art, Sarasota, Florida)は展示会立ち上げのプロセスに生徒達を参加させる体験重視の鑑賞活動の実施、またオハイオ州、サブリン市にあるダブリン高校(Dublin High School, Sublin, Ohio)では、地域の環境問題として「水の汚染」を取り上げ、環境アートを題材に、現代アートの持つメッセージ性を考える等の鑑賞教育を行っている。

DBAEにおける鑑賞教育の方法例は以上のように多岐にわたっているが、共通の過程は先の四つの理念を総合した形で、また芸術作品にかかわらず、他の学科(社会、科学、歴史等)と関連させるかたちで実施されているといえよう。方法論としての共通のプロセスには下記のようなものが含まれている。

- 1、紹介と問題提起(テーマに関する社会的文化的背景の紹介と問題提起)
- 2、討論(特定の地域、時代における芸術の意義、定義の確認)
- 4、研究調査(個人もしくはグループ)
- 5、発表(個人もしくはグループ)
- 6、作品作成(個人もしくはグループ)
- 7、作品批評

(2)VTS (Visual Thinking Strategy)^{註5)}を通しての鑑賞教育

DBAE理論を基にした多種多様な鑑賞教育の可能性を以上に述べたが、現在「鑑賞教育」として米国にて浸透しつつあるVTS理論をここに紹介したい。日本においても1990年代初頭に美術館教育を通して紹介された「視覚思考能力」を高めるための鑑賞教育の一つである。

VTSとは「Visual Thinking Strategy」の頭文字を取った略語であり、美術作品を通して子ども達の考える能力、コミュニケーションの方法、つまりヴィジュアルリテラシー（視覚読み書き能力）を高めるための鑑賞教育の一方法論である。心理学者であるハウセン(Abigail Housen)が、1970年代から研究している「美意識発達理論」^{註6)}を基礎に、元ニューヨーク近代美術館美術教育長であったヤノワイン(Philip Yenawine)と共同で開発された。

ハウセンによると、美術館を訪れる人々の鑑賞態度には5つのパターン(段階)があり、多くの人々は、「段階Ⅰ」の自分の直感による好き嫌いで、または「段階Ⅱ」の作品の技術性もしくは写実性で美的価値を判断するとしている。この段階は年齢によってではなく、その人の置かれた美的環境によって決まるとされる。VTSの鑑賞活動は、こういった鑑賞の初心者と呼ばれる人々(「Bigger viewers」とか「Naive viewers」とか呼ばれる)を対象としており、初期における鑑賞活動は美術史の知識を提供することではなく、作品を良く観察し、何が描かれていて、何を発見し、自分の言葉で表現することに重点を置くべきであるとしている。学校教育に連携する形として、なるべく低学年から定期的に義務教育を通して指導することが望ましいとしている。芸術作品を通して発見する喜びを体験することから始め、最終的には作品に対する自分の好き嫌いの理由を自分の美的経験に照らし合わせ、判断できる能力を培うことにある(「ヴィジュアルリテラシー」の第二の定義)。

また、DBAE理論が特定の鑑賞教育方法を限定していないのに対して、このVTSは鑑賞活動方法をはっきり明示している。具体的には、スライドを通しての美術作品に対する啓蒙活動が中心で、教師と児童生徒との対話を軸に進められる。また、通常の鑑賞教育と異なり、鑑賞活動を指し示す教師側に美術史の知識をさほど要求していないところが特徴でもある。指導者である教師の役割は、美術作品に対する生徒達の発見をうまく誘導し、彼等の発言した言葉を別の言葉に言い替えることにより、自然に語彙力を高めていくことをも旨としている。

方法論はいたってシンプルで明確。テーマが同じ美術作品のスライド三枚^{註7)}を一構成とし、一作品について約15～20分づつ、三作品全体の鑑賞対話時間を約45～60分の授業時間(美術の時間に限らない)で行い、合計九回、最後に美術館訪問を含めて十回を一コースとしている。通常、美術作品をスライドによって紹介する教師は、以下の三つの質問をのみ繰り返し行い、生徒の回答に対して良い悪いなどの感想などは避けるべきと言及している。

VTSにおける基本的3つの質問

質問1「何の絵でしょう？この絵の中に何が見えますか。」

(What's going on in this picture?)

質問2「何をみてそう思います。」(What do you see that makes you say that?)

質問3「他に何かありますか。」(What else can you find?)

3セントマシュー学校(シャンペーン、イリノイ州: St. Matthew school, Champaign, Illinois)におけるVTSによる鑑賞教育の実践例

対象学年: 中学一年 (7th grade)

鑑賞題材: 古典から現代芸術まで世界の作品をスライドを通しての鑑賞

鑑賞目的: ヴィジュアルリテラシー(視覚読み書き能力)の促進

鑑賞活動:

第一週～第九週: 英語か宗教の時間を使って、毎週一回、3スライドずつ9週に渡って紹介。

第十週: イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校(University of Illinois at Urbana-Champaign)にあるクラナート美術館(Krannert Art Museum)を訪問。

教師と生徒との対話例(ホッパーの「夜の鷹達(Night Hawks, Hopper, 1942)を鑑賞)

ピッカード先生「皆さん、この絵を良く見てください。この絵の中に何が見えますか。間違った答えなどありません。皆さんが見たままのことを話してください。」

(最初少し沈黙があるが一人の生徒が手を上げると皆一斉に生手を上げる。)

ピッカード先生「ジェニー、何をを見つけましたか。」

ジェニー「シカゴかどこかの街のバーで、男女が閉店間際にお酒を飲んでいるところだと思います。」

ピッカード先生「何をみて閉店間近だと思ったのでしょうか。」

ジェニー「バーの中に人はあまりいないし、街中にも誰もいないようなので、だいぶ遅い時間帯だと思います。」

(教師はジェニーの説明を別の言葉に置き換えて皆に繰り返す。)

ピッカード先生「皆さん、この絵の中に他に何か見えますか。」

(また一斉に生徒が手を上げる。その中から一人を名指す。)

リム「ジェニーの言った、そこがバーだっていうのは賛成だけど、ぼくはシカゴではなくて、フィラデルフィアだと思うな。そして調査員の男が女の人に質問しているところだと思います。」

ピッカード先生「リム、何をみてフィラデルフィアだと断定できるのでしょうか。」

リム「絵の上の方にフィラ、、、とかいう文字が見えるでしょう。」

ピッカード先生「皆さん、リムはここはフィラデルフィアのどこかだと断定しましたが、さてここでちょっと質問を変えてみましょう。」「皆さんはこの絵の中に描かれている場所が田舎ではなく、都会であると断定しますか。」

皆一斉に「もちろん」

ピッカード先生「それでは何をみてそう判断できるのでしょうか。」

皆口々に「店の中の男女のかっこうが都会的だし、、、道路が舗装されてるし、、、ブ

ティックが回りにたくさんあるし、、、」
ピッカード先生「街の様子、特徴から都会であると判断するわけですね。」
ピッカード先生「それでは他に何か新たに発見できるでしょうか。」
（手を上げた生徒の中からではなく、じっと絵をみている一人の生徒を指差す。）
ピッカード先生「クリス、あなたはどうか。何か発見できますか。」
クリス「ぼくは、ここはバーじゃなくてダイナー（軽食店）で、コーヒーか何かを飲んで
いるところだと思うな。」
ピッカード先生「何を見てそう思うの。」
クリス「普通、バーはそんなに大きな窓なんかないと思うし、もっと店内は薄暗いん
じゃないかな。」
（一枚の絵に対して同様のやりとりが全体で15分ほど続く。）
ピッカード先生「さて皆さん、このスライドを通してたくさんのもことやことを発
見することができましたね。さて次のスライドに行ってみましょう。」
（この後、続けてホーマーの水彩画「The Fog warning, 1885」、リベラのメキシコ
壁画のパネル「History of Cuernavaca and Morelos, 1930-1」、を各15分づつ、
全体で約45分の鑑賞活動を行った。）

以上のように、VTS鑑賞活動は、生徒との対話を長期に続けることによって、生徒一人一人が自然に美術作品を語ることようになり、最終的には作品の背後に隠された作家の意図、文化的社会的背景に興味を持たせるように指導することを旨とする。理想的には年齢が早ければ早いほど良く、連続的に低学年から高学年へと、この鑑賞教育を続けることにより、思考する力をつけること、さらに自分の思考の原因を美的経験と結び付けて判断できるよう持っていくことを理想目的とする（第二のヴィジュアルリテラシーの定義と同様）。地域によって状況は異なるが強制ではないが、最後に美術館訪問でVTS鑑賞教育のトレーニングを受けた美術館員の指導する鑑賞ツアーで、実際に芸術作品の前で同様の美術鑑賞を行うことを推奨している。

4 米国における鑑賞教育の問題点と今後の方向

「鑑賞」と「表現」は表裏一体であり、切り離すものではないと良く言われる。しかし現実には造形・制作としての「表現」に多くの時間が割かれ、「鑑賞」は付けたしにすぎないのが日本における美術教育の現状である。皮肉なことに米国においては、全く対照で「鑑賞」とも言うべき「批評」に時間を取りすぎて、本来の物を作り楽しむという行為が軽視されているのではないかと疑問が表面化しつつある。物を作るという体験を通して得られる「感性」の教育が再度、提示され始めたのである。しかしながら、米国における鑑賞教育の在り方を考える時、ヴィジュアルリテラシー（視覚読み書き能力）を高めるための鑑賞という活動が生まれてきた背景をかんがみる必要がある。日本と異なる多民族国家という社会的文化的背景を持つ米国において、共通の「美的感性」を唱った鑑賞活動を推進することは、限りなく困難であるといえよう。また目的設定の比較

的簡単な他学科と比較し、常に過小評価されがちな美術教育において、他学科との共存共栄をはかる上にもリテラシーを高めるための鑑賞教育という概念が米国において生まれたのも自然の流れである。「感性」か「知性」かの二者択一の発想は、鑑賞教育の形を問う上で、長年繰り返されてきた討議でもある。二者択一ではなく、両義を持った鑑賞教育活動の推進が理想であるのはゆうまでもないが、これは米国においても、今後の大いなる課題であると言及できる。

5 まとめ

鑑賞教育理論と実践は、各国の文化的背景を元に発展したものであり、米国における鑑賞教育の方法論もまた例外ではない。米国において鑑賞教育が「感性を高める」ではなく、「思考能力を高める」活動に重きをおいている点に、日本の美術教育社会の中では、疑問視されるむきも多いであろうことは想像に難くない。しかしながら、米国での鑑賞教育の在り方は、日本における「感性」の教育としての鑑賞教育に対する、意義・方法の再確認を促しているともいえよう。いうまでもなく、日本における鑑賞教育において、今必要としているのは、この感じたものを自分の言葉で表現する能力を育てることにある。ともすれば教師の一人合点に落ちがちな感性鑑賞活動を新たな方向へと見直す良いきっかけとなるであろう。

註

註1)シーボルト(Seabolt)は論文「Defining Art Appreciation」(P. 45 『The Journal of National Art Education Association』44～48頁、7月号、2001年)の中で、「鑑賞」という語の定義をいくつか紹介している。オックスフォード英語辞典(「Oxford English Dictionary」581頁、1989年)による「知覚、認識、理解力」、ベル(Bell、1913年)の「感覚的、感情的、知覚力」、デューウィー(Dewey、1934年)の「美的知覚」を上げた後、「鑑賞教育」活動には、ムンロー(Munro、1941年)の「理解し、楽しむこと」という定義が最も必要で◆ると説いている。またその方法論に普遍性はないと言及。

註2) Visual Literacy(視覚読み書き能力)の定義1

「美術を良く観察し、それらから多くの事柄、意味を発見できる能力をヴィジュアルリテラシーと呼ぶ。」

「The ability to explore artistic images and to discover the many facets and layers of their meaning is called Visual Literacy」

(「Children's Art: The Development of Intention」302頁、シモン、1996年)

註3) Visual Literacy(視覚読み書き能力)の定義2

「あなたが『私はこの絵画が好きだ。』と言った場合、なぜ好きなのかを自分で認識する必要がある。その認識能力のことをヴィジュアルリテラシーと呼ぶ。」

「I like this or that painting,」 You need to be able to recognize why you like it, how it communicates to you. This ability is given the name visual literacy」

(p.18, 「A World of Art」18頁、セイヤー、2000年)

註4)DBAEの特徴は、美学(Aesthetics)、美術制作(Art-making)、美術史(Art History)、批評(Critics)の四つの理念を含んだ形での美術教育カリキュラムの作成施行の推奨である。DBAEは美術教育のアプローチであってカリキュラムそのものではないと唱っているように、各々の地域の文化的特性に合わせた地域独自の美術教育カリキュラムの作成を推奨しているため、具体的なカリキュラムは存在しない。また昨今米国において「Comprehensive Art Education(総合理解美術教育)」という表現を良く耳にするが、これはDBAE理論と同意義である。カリフォルニア◆Bロスアンジェルスにあるゲッティセンター(The Getty Center for Education in the Arts)の財政的な支援を受け、現在も各地でDBAE理論を基にしたカリキュラムが施行されている。

* DBAEについての詳細は下記の参考資文献を参照下さい。

-藤江充「DBAE、、、」-DBAE研究の先駆者的、指導者的存在である著者のDBAE論文集

-徳雅美「日米の美術教育比較:21世紀に向けての美術教育
(『アートエデュケーション』75～84頁、No. 27. 建ぱく社、1997年)-DBAEとVTSの比較検討

-山本朝彦(1993)「美術教育と批評-カオスからの出発-」(『メディア時代の美術教育』155～182頁、柴田和豊編、国土社、1993年)-DBAEの意義と問題点を簡潔にまとめてある好著

-Stephen Dobbs (1992)The DBAE Handbook:An Overview of Discipline-Based Art Education-DBAE関連の著書は多く出ているが、その中で最も簡潔のDBAEの定義とその推進方法をまとめてある

-Brent Wison (1997)Quiet Evolution: Changing the Face of Arts Education-米国全体にまたがった、DBAE実践カリキュラムの実例紹介と検討の意義ある本

-Ralph A. Smith (2000) Readings in Discipline-Based Art Education: A Literature of Educational Reform. NAEA -DBAEに関する主要な論文を編集したもの

註5)VTSについての詳細はVTSの関連サイトである「Visual understanding in Education／www.vue.org)を 参照のこと。

註6)ハウセンの「美意識発達理論」とはどういうものか？

美術館に訪れた約6,000余の人々(6歳から80代までの男女)を対象に、取材を行い(各々が見たままの印象を自分の言葉で語ってもらうという方法)その結果を分析し

、観客(聴衆)の鑑賞態度を以下の五つの発達段階に分類したもの。年齢ではなく個人のおかれている美的環境(芸術作品に日頃から親しむ環境にいるかどうか)でその段階は決まるとしており、多くの方は段階1、もしくはⅡに属すとしている。

- 1) 段階Ⅰ「物語り派(Accountive viewers)」ー 好き嫌いで価値判断する段階
- 2) 段階Ⅱ「写実派(Constructive viewers)」ー 技術性、写実性で価値判断
- 3) 段階Ⅲ「分類分析派(Classifying viewers)」ー 美術史で鑑賞
- 4) 段階Ⅳ「解釈派(Interpretive viewers)」ー 構成要素で鑑賞
- 5) 段階Ⅴ「再構築派(Re-creative viewers)」ー 前段階を踏まえた上で個人の嗜の原因を判断できる段階

註7) VTS鑑賞教育に伴うスライドの扱い

ヤノワインは、選択するスライドは特別有名な作品でなくても良いが、初心者が興味を持ちやすく、内容発見がしやすいものであることが重要であるとしている。

スライドを個人で選択する場合は、下記の10点について考慮するよう勧めている。

- 1) 分かりやすさ(Accessibility)ー内容が発見しやすいもの
- 2) 表現的内容(Expressive Content)ー解釈がいくとおりにもできるもの
- 3) 物語性(Narrative)ー想像によって物語が作りやすいもの
- 4) 多様性(Diversity)ー時代、文化を広くカバーしたもの
- 5) 写実性(Realism)ー 抽象的なものは避けること
- 6) シリーズ・テーマ(Series/Themes)ーテーマ等の共通するものが連続して紹介する3点にあること
- 7) 素材(Media)ー作品素材(絵画、描画、版画、写真、彫刻等)を広くカバーすること
- 8) ジャンル(Artistic Genre)ー工芸、美術等のジャンルを広くカバーすること
- 9) 著名作家と作品(Key Artists and Works)ー時代を代表する作家とその作品
- 10) 連続性(Sequences)ー3点のスライドは内容が単純なものから複雑なものへと連続性を持たせること

どのようにスライドを選択するかは下記の参考文献中のスライドを参考のこと。

-Housen, A. and Yenawine, P. (2000). Visual Thinking Strategies: Learning to Think and Communicate Through Art (Basic Manual Grades K-2). New York: Crystal Productions.

-Housen, A. and Yenawine, P. (2000). Visual Thinking Strategies: Learning to Think and Communicate Through Art (Basic Manual Grades 3-5). New York: Crystal Productions.

- 写真1:最初の紹介作品、ホッパの油絵「夜の鷹達」を熱心に見入っている様子
- 写真2:同上の絵に対してピッカード先生が生徒の説明を繰り返しているところ
- 写真3:「他に何か見えますか」の質問に手を上げる生徒たちと絵に見入る生徒たち
- 写真4:第二の作品、ホーマーの水彩画を指すピッカード先生
- 写真5:手を上げる生徒達
- 写真6:第三の作品、リベラのメキシコ壁画のパネルを見て答えようと挙手する生徒達
- 写真7:同上の写真
- 写真8:同上の写真
- 写真9:VTS鑑賞活動の後、学校の中庭にて皆で写真撮影(左端は筆者と息子)
- 写真10:同上の写真(学期末最後の日だったため、お別れ会の残りのキャッデイーを皆手に持っている。)

4、引用文献

徳 雅美(1997)日米の美術教育比較:21世紀に向けての美術教育
pp. 75-84. アートエデュケーション. No. 27. 建ぱく社

Housen, A. and Yenawine, P. (2000). Visual Thinking Strategies: Learning to Think and Communicate Through Art (Basic Manual Grades K-2). New York: Crystal Productions.

Housen, A. and Yenawine, P. (2000). Visual Thinking Strategies: Learning to Think and Communicate Through Art (Basic Manual Grades 3-5). New York: Crystal Productions.

Sayre, H. (2000). A World of Art (4th. Ed.). Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.

Simmons, M. (1996). Children's Art: The Development of Intention. Needham Heights, MA: Simon & Schuster Custom Publishing.

5、参考文献

Arnheim, R. (1972). Toward a Psychology of Art. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Baldwin, J. M. (1975). Thought and Things: A Study of the Development and Meaning of Thought or Generic Logic. Vol. III and IV. New York: Arno Press.

Bruner, J. (1990). Acts of Meaning. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Dewey, J. (1958). Art as Experience. New York: Capricorn Books, G.P.Putnam and Sons.

Singer, D. and Revenson, T. (1996). A Piaget Primer: How a Child Thinks, revised edition. New York: Plume/Penguin.

Vygotsky, L. (1962). Thought and Language. Cambridge, MA: MIT Press.